

# 福島、見えない災害を描く

明治大学理工学部教授 青井哲人

## 1. はじめに

### 1-1 福島の被災地から

福島の原発被災地に関わる事柄は目に見えにくい。それを可視化し、地図集のかたちで住民の皆さんに届けるプロジェクトを展開している。NPO 福島住まい・まちづくりネットワークを主体とし、福島県の助成を得て行っている事業であり、建築、ランドスケープ（篠沢健太）、グラフィックデザイン（中野豪雄）、イラストレーション（野口理沙子、一瀬健人）、編集（川尻大介）などの専門家と学生とでチームをつくり、福島の方々の協力をいただいて進めている。この地図集を、わたしたちは『福島アトラス』と名付けており、A4 版冊子、あるいは A1 版両面折りたたみなどの形で発行している（図 1）。



図 1 福島アトラス（2017年に01号発刊。今後も継続する。）

福島の原発被災地に行かれたことがあるだろうか？ほとんどの方は、行かれたことはないだろう。東京や、あるいは東北にいても、実は福島に足を踏み入れたことがない人は大勢いる。

私は1995年4月に神戸芸術工科大学に着任したが、その直前に阪神・淡路大震災があった。当時は京都におり大きく揺れ、被災調査等で被災地を歩き回った。1999年9月に台湾で地震があった時も台北におり、すぐさま被災地をまわり、折々で色々な調査をしてまわった。しかし、災害後の様々な状況をしっかりと見て、それを歴史的に捉えなおすプロジェクトや研究を本格的に始めたのは、東日本大震災からである。最初に津波災害の反復性と歴史性という問題に取り組んだ。しかし福島第一原発の事故災害は、放射能で汚染されるという大変特殊な災害で、どう関わればよいか分からなか

った。そこへある人物から相談を受け、それに応える形で地図集をつくるプロジェクトの監修役を引き受けたのが2016年だ。

福島では12市町村の方々が、行政的に避難指示を受け、自分の故郷から離れなければならなくなった。それ以外にも自主的に避難された方が沢山おられ、ひとつの統計によると30万~40万人の人達が、福島県・宮城県を中心に、北海道から沖縄まで広域的に移動した。

この原発事故災害は「見えない災害」であるということが重要だと思う。第一に、放射能自体が見えない。汚染も地震や津波のように可視的な現象ではないので風景を見ても何が起きているかよく分からない。第二に、現地へ行ってもある時期までは誰も人がいなかった。そのため村や街に行っても生活の様子がなく、被害や再建にとりくむ住民の姿が見えなかった。第三に、何がどんなプロセスで進むのか前例が少なく予測できない。このように、何が起きているのかがはっきりと掴めず、全貌をどう理解すればよいのかよく分からないのが、福島の原発事故災害なのではないだろうか。それを見えるようにするのは意味のある仕事だと思った。

最初に、この写真を見ていただきたい(図2)。2017年6月なので、もう3年近く前のものだ。この風景は、行政的な避難指示があった12市町村のひとつで、南相馬市小高区上浦の集落を高台から捉えた写真だ。何か悲惨なことが起きたようには見えず、緑が青々としてとても綺麗だ。この時、水田の耕作が始まっていた。土をはぎ取る除染作業が、比較的早く済んだ場所ではあるが、実はあの田んぼを耕して



図2 ある農村の風景(南相馬市小高区上浦集落・2017年6月)

いるのは地元の人たちではなく、環境省の事業として、データをとるための試験営農だった。風景を見ても、何が起きているか分かりにくい。手前はSさんという方のお宅で、敷地内の高台から撮っているのだが、この方は避難先の仮設住宅団地で自治会長という重責を担った。みなさんが心に傷を負い、将来も見えずに4~5年間仮設住宅暮らしをするなかで、なんとでも自分たちの上浦集落を復活させたいと強く思うようになった。それまでは地域のことを考えたことはあまりなかったそうだ。古文書を読むのが好きで、上浦の歴史はよくご存じではあるが、コミュニティやまちづくりの意識は必ずしもなかった方が、仮設住宅でコミュニティをつくらなくてはいけなく

なった経験から、自身が率先して戻るという決断をし、2017年の春、ある建築家に自分の家のリノベーションを頼んだ。暮らしやすいように床暖房を入れ、レベル差を徹底的に取り払い、Sさんと奥さまの2人で戻ってこられた。近所の人たちが月に一度、あるいは週に一度ぐらいは自分の家の様子を見に来るのだが、その時に立ち寄ってもらい、話をし、意見・情報交換をするなかで、戻ろうと決断してくれる人が少しずつ増えていくのではないか。そう考え、いわばコミュニティ再生の拠点として自分の家を位置づけた。つまりこれは自分の家であると同時に、コミュニティの家である。彼らが建築家に頼んだのはそういう場所をつくることだった。この風景には、いくつかの家が集まっているが、この写真の段階で、1人戻ってこられた。他の家は、この家もこの家も廃墟だ。集落にあと10軒くらいあるが、そこには誰一人いない。福島原発被災地というところは、風景を見ていても何が起きているか本当に分かりづらい。

## 1-2 芳賀沼整とその仕事

ここである人物を紹介したい。ある人の紹介で私は監修役を承けたと言ったが、そのある人のことだ。そして、Sさんの家をリノベーションしたある建築家というのもこの人だ。芳賀沼整。1958年生まれで、まだ若い。2019年、つまり昨年末の12月21日に亡くなった。非常に残念だ。この方は、福島県内の一番内陸の、いわゆる会津地方に製材・建設会社の三男坊として生まれた。東京へ出て文学部で勉強し、愛読書は孔子という不思議な人だが、大学を出ても土建屋やら曳家業やらで働くという生き方をし、それから建築を学びはじめ、ついには東北大学で博士学位論文を書いている。自分の故郷の針生地区に、はりゅうウッドスタジオという建築事務所を開き主宰するが、社長は自分よりもうんと若い人に任せ、自分は日本全国を飛び回って仕事を獲得し、木材をつかった建築を広める活動を精力的に展開していた。3.11以降、彼は本当に信じられないパワーで動き回った。ほとんど寝ていないのではないかとされるペースで車を走らせ、日本全国どこへでも行ってしまふ人だった。福島県は広いので、リノベーションして欲しいとか、仮設住宅をどうしたら良いだろうかと、被災地にも色々な期待がある。だが期待以上のものを背負って飛び回っていたなか、去年の5月に突然白血病が分かってしまう。ひとつの癌細胞が、1週間で拳より大きくなってしまふという、ものすごく速度が速く、大変症例の少ない病気だったと聞いた。7カ月にわたって過酷な闘病生活を送り、治療プログラムが終わって退院された後、また悪化して再入院したが亡くなられてしまった。大変残念だ。私は彼の意思でプロジェクトを始め、地図集を作っていた。彼は、大きな思いと様々なテーマを抱えていたけれども、残念ながら志半ばでこの世を去ってしまった。享年61歳。私たちに残された仕事の意味を考え直さざるをえない。福島アトラスプロジェクトは今後も継続していきたいし、福島のことをできるかぎり多くの方に伝えていきたい。

これは、彼が主催するはりゅうウッドスタジオが設計した木造の仮設住宅だ(図3)。

大変魅力的である。仮設住宅といえば、みなさんはプレハブ建築協会のものをご存知だろう。プレ協は大和リース(株)をはじめとする、日本のプレハブメーカーがつくる組織で、各県と協定を結び、激甚災害が起きるとこれにもとづいて所属企業が仮設住宅を供給する。プレハブ協会がつくった仮設住宅



図3 浪江町恵向仮設住宅（本宮市内・2017年8月）

といえば、阪神・淡路大震災の時にたくさん運動公園のようなところに、兵舎のように並んでとても評判が悪かったが、プレ協はなすべき仕事をしたのであって、問題は他の選択肢が弱かったことだ。東日本大震災は大変広域に渡る災害で、仮設住宅の必要な戸数が6万棟に達した。プレハブ協会が、3月に地震が起きてから夏休みお盆までの間に供給できる数が3万棟で、福島1万棟、宮城1万棟、岩手に1万棟ずつ供給することとなった。宮城・岩手は、時間がかかってもプレハブ協会に追加をつくってもらう判断をしたが、福島は原発事故という理不尽な災害を抱えたため、なんとかお盆までにみなさんに家らしい家に入って欲しいと県は考えた。県内産の木材を使った木造で、県内の設計事務所と事業者が、自ら木造仮設住宅の提案をするというかたちでプロポーザルを募集し、選定したものを8千棟ほどつくらせた。これが大変面白く、魅力的な可能性を開いた。先ほどの芳賀沼さんがつくったものはその一例だ。芳賀沼さんは、いくつかの仮設団地を自分たちが開発した木造で作り、住人のところに足しげく通った。

私が芳賀沼さんに初めて出会ったのは、2011年の震災の翌年2012年の6月、あるシンポジウムで彼と僕がスピーカーで同席した時だった。芳賀沼さんが喋った内容には迫力があつた。自分がつくった仮設住宅団地に通り詰めて、一年間で3000人にインタビューをしたという。あなたはどこ出身ですか？どういうルートで転々と避難してここに至ったのですか？これから地元に戻りたいですか？戻りたくないですか？どんな条件なら戻りたいですか？そういったインタビューを重ねて、戻りたいという人はまだ少ないけれども、戻りたい人が潜在的には多いことを彼は確信する。彼らの設計した設住宅は、120mm角の杉材をそのまま積み重ねてログハウスのようにしている。これをやると普通の木造軸組構法と違って、断熱材も、内装も外装も不要だ。木がそのまま断熱材であり、内装材であり、外装材である。そして、上からクレーンで順番に抜いていけばバラバラに解体でき、どこにも欠損が生じない。つまり材を壊すことなくばらすことができる。この時木造の仮設住宅をつくった事務所はたくさんあるが、だいたい在来構法の軸組でやった。柱と梁、柱と土台も、金物で留められる。これを解体し

ようすれば材は接合部で壊れ、結局再利用できないし、断熱材、内外装材はゴミになる。しかし、芳賀沼さんのものは全部再利用可能だ。汚染されている故郷に帰るまで、この場所でずっと5年、長ければ10年15年暮らさなければならぬだろうと、当初は考えられた。したがって仮設住宅は神戸の時と違い、「中期仮設住宅」として、いわば暫定の「集落」として位置付けるのだと考えた。配置計画は非常によくできており、本当に集落のようだ。厚労省が定めた面積や価格の基準に合わせているが、配置計画によって、これほど魅力的な空間をつくれる。これは阪神・淡路大震災からの反省だと思う。そして彼は、仮に5年10年15年と暮らしたあと、その愛着ある仮設住宅を解体して自分の故郷へ持っていき、それを増築しながら故郷の町や村を復興することができないかと考えた。私が彼と出会った発災一年後には、既に自ら資金を用意して、木造ログ仮設を解体して被災地へ持っていく社会実験をやっていた。いわば、社会再建のシステム、時間的なプロセスを動かしていくための方法として、あるいは林業の産地から製材屋、設計、事業者、大工に至るまで、復興に参加できる産業の仕組みとして、彼は仮設住宅を考えていた。芳賀沼さんという人は、こういうものを作ってきた人なのだというのを皆さんに伝えたい。世の中には色んな建築家がいるが、こんな建築家がいるのかと、発災の翌年に私は驚き、その日以来最も尊敬する建築家の一人が芳賀沼整だとあちこちで言っている。

2015年の1月に彼からメールがきて、居住制限がかかっているところも含めてご案内するので来てくださいということで、何人かの友人たちと一日かけて色んなところに連れて行ってもらった。

これは大熊町という第一原発が立地している町村だ。ここは完全に居住制限がかかったまま、この写真の時点で4年間経っているのだから、誰も住まないまま地震で壊れた家が放置されている状態の廃墟だ。この時に一緒に回った建築家や建築史家の皆さんは、福島を記憶をとどめるためにこれを保存するべきであると発言した。私は違うのではないかと思った。芳賀沼さんは、建築のあらゆる方法を使って人々が故郷に戻るのを手助けすると言っている。建築家は、そういう風に社会を構想し、そのヴィジョンに向かって打てる手を打ち続ける職能のほうであると思った。偉そうに言っているが、芳賀沼さんが身をもって教えてくれたことだ。

この時、先ほど話したSさんに、リノベーション前の家でお会いできた。この時点では、まだ戻るか戻らないか決断しかねていた。芳賀沼さんは、2人しか住まないのだから、二階は床を抜いて大きい吹き抜けにし、一階は床をはずして土間と連続の空間に、床暖房も入れましょう、高齢の住まいとしてはお風呂は暖かくした方がよいと提案した。それに背中を押されるようにしてSさんは戻った。このようにして一つの場所と風景ができた。この家ができた途端、Sさんにはもう迷いがなくなった。2015年の段階では迷っていたSさんが、この集落を絶対に生かすのだと我々に滔々と話してくれたのが2017年。まったく違う人になっていた。これはSさんに見せていただいた、

自分が家を建てる前の明治期に先祖が建てた茅葺の家だ。

話をうかがうと、この集落には 15 軒の家があるが、17 世紀、江戸時代の初期から 15 軒という数字は変わらない。文書で分かるという。農地の大きさや、ため池による灌漑の仕組みが、15 軒を生かすようにできていて、それより多くなることはないし、それより少なくなってもだめなのだと。今はまだ 2 軒しか戻っていない（2020 年秋の段階では数軒に増えている）。S さんはなんとかしたいと、芳賀沼さんに、あの木造仮設をひとつ移築してくれと頼んだ。そこに都会の若い人が、営農したいと来るかもしれないから募集し、その拠点にしたいと。部分的には企業に任せても良い。とにかくこの集落の農地が死なないように、自分が死ぬ前に、今までの集落とは違う形でも良いから存続できる形をつくりたいと、熱く語ってくれた。それが本当に良いことか、私には判断ができないが、それでも説得力があった。

## 2. 「福島アトラス」

### 2-1 「福島アトラス」の概要

さて、前置きが長くなったが、福島アトラスを紹介する。

NPO 法人福島住まい・まちづくりネットワークが企画・発行主体で、要するに事業の主体だ。芳賀沼さんは、このプロジェクトの、いわば親分だった。熊みたいな風体で、とても行動力のある哲学者というと謎めいた方だが、いつも我々が調査でインタビューなどをしていると、ふと現れ「青井先生、こういうことが大事だと思うんだ」と 3 分くらい話して、しばらくすると消えているという、文字どおり神出鬼没な人だった。アトラスは、2016 年 9 月に芳賀沼さんからこういうことがしたいというお話を受けて、その翌年の 3 月に第 1 号となる『福島アトラス 01』を出した。信じられないスピードだった。この時は本当に突貫工事で、各自治体や県から集めた情報を集約して、それを中野豪雄さんにインフォメーショングラフィックスという手法でヴィジュアルをつくってもらったり、取材記事を書いたりして、避難 12 市町村で何が起きているのか、とにもかくにもその全貌が一望のもとに掴めるような地図集をまずつくった。

『福島アトラス 02』は、避難をしている、つまり故郷じゃないところで避難者たちが暮らしてきた、広い意味での「住まい」を特集した。福島の仮設住宅団地の全プラン集を作ったりもした。3 号目以降は、考え方を変え、いわば 3.10 までのそれぞれの故郷の「環境世界」を復元的に描く作業をはじめた。地形、植生、そこに人々がどう取り付き、どんな生業を組み立て、どんな集落や家を作って生きてきたのか、その世界性、あるいは生存の仕組みを目に見えるようにする地図集だ。

アトリエワンの貝島桃代さんがキュレーターを務めた 2018 年のヴェネチアビエンナーレ建築展に出展させていただいた。グッドデザイン賞もいただいた。ベスト 100 選出に加え、グッドフォーカス賞（復興）という特別賞をいただいた。受賞時には芳賀沼

さんが講演した。

余談になるが、私は2012～13年、東日本大震災が起きた翌年から、建築雑誌の編集長を2年やり、2年間24冊で、震災・災害に関わる様々な視点から建築に関わる色々な特集を組み、これ以上はできないというくらいにやれるだけのことをやった。岩手では、都市計画の饗庭伸さん、文化人類学の木村周平さん、などの友人たちと津波被災地の研究活動もやってきて、最近、『津波のあいだ、生きられた村』（鹿島出版会）と題する本を出すことができた。近世以来の集落の歴史を社会、文化、生業、信仰に至るまでの幅広い関心からフィールドワークし、その中で繰り返し襲ってくる津波を村々がどう経験してきたのかを具体的に考えている。

## 2-2 場所を失った社会の動き

次に、福島におこったことをいくらか具体的に紹介していきたい。太平洋沿岸の12市町村が、行政的に避難指示があったエリアだ。

原発はどこにあったかという、双葉町と大熊町とのちょうど町境である。2011年の春、第1原発が事故をおこした後、風は南東から北西に向かって吹いた。原発からはき出された放射性物質は、南東から北西に向かって広がり、雪や雨で山や大地に落ちた。その後、除染作業が進められ、今も除染が行われずに残されている地域もある。ここは、まだ誰も立ち入ることができない。避難指示が刻々とどのように変わってきたのか、アトラスの01（1号）でまとめている。

政府統計によれば、30万とか40万という避難者数が出ている。避難先は福島県だけではなく、全国になっていることが分かる。

『福島アトラス02』では、たとえばこんな図をつくった（図4）。さきほども言ったように、芳賀沼さんたちのNPOでは、多数のインタビュー・データがあったので、その中から一つの家族をピックアップし、その家族が元々住んでいた集落はどこかということを訪ね、そこから何日にどこへ動き、その次に何日にどこへ動きと、転々と避難していく様子を再現したものだ。

とりあげたのはMさんという方の家だが、私ど

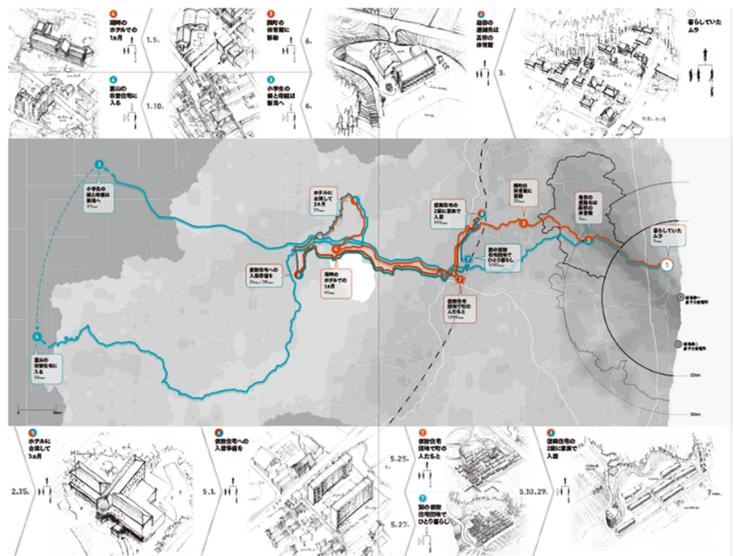


図4 ある家族の避難経路（『福島アトラス02』2018年3月）

もはその家族の辿った避難の軌跡を追体験的に実際に辿ってみた。最初に住んでいた集落は、「居久根（いぐね）」と呼ばれる防風林の杉の木立が集落を守っており、1~2軒の古い家を核に、分家で増えてきたのであろうと思われる農村集落だった。

M家は最初に地元の中学校の体育館にまず入り、次に隣町の公民館、そこからまだ駄目だということで隣村の公民館、体育館に移動した。県内の旅館やホテルへとさらに動いている。おそらく子供がいたため、さらに遠くに行った方が良いと考えたのだと思うが、子供と母親の2人は他の家族3人と別れて新潟や富山にも動いている。そうして盆過ぎに仮設住宅に入るまでに頻りに動かなければならなかった。過酷だ。最初の5カ月で10カ所以上を転々としている。こういう人たちが何十万人といるのだ。もしすべての避難の動きを一枚の地図に重ねたとしたら、線の錯綜で地図はかき消されてしまうだろう。そこまではやっていないが、Mさんの場合と同様の地図を72家族分つくった。これを眺めるだけでも、避難というものの過酷さと個別事情が推察される。

避難に関して、福島から逃げた人が日本全国にどれだけ分布しているかの行政データはあるので、それも地図に描いた。それから福島県内に限定し、たとえば浪江町の人が、避難してどこに何人暮らしているかということも地図にできる。そういった地図を多数つくり、冊子に綴る。こういう作業をしたのが『福島アトラス 01』だったのに対して、『福島アトラス 02』では、住まいに着目して、いまお話ししたような避難のリアリティや、仮設住宅団地のプラン数をつくったりした（図5）。仮設住宅と、その後の

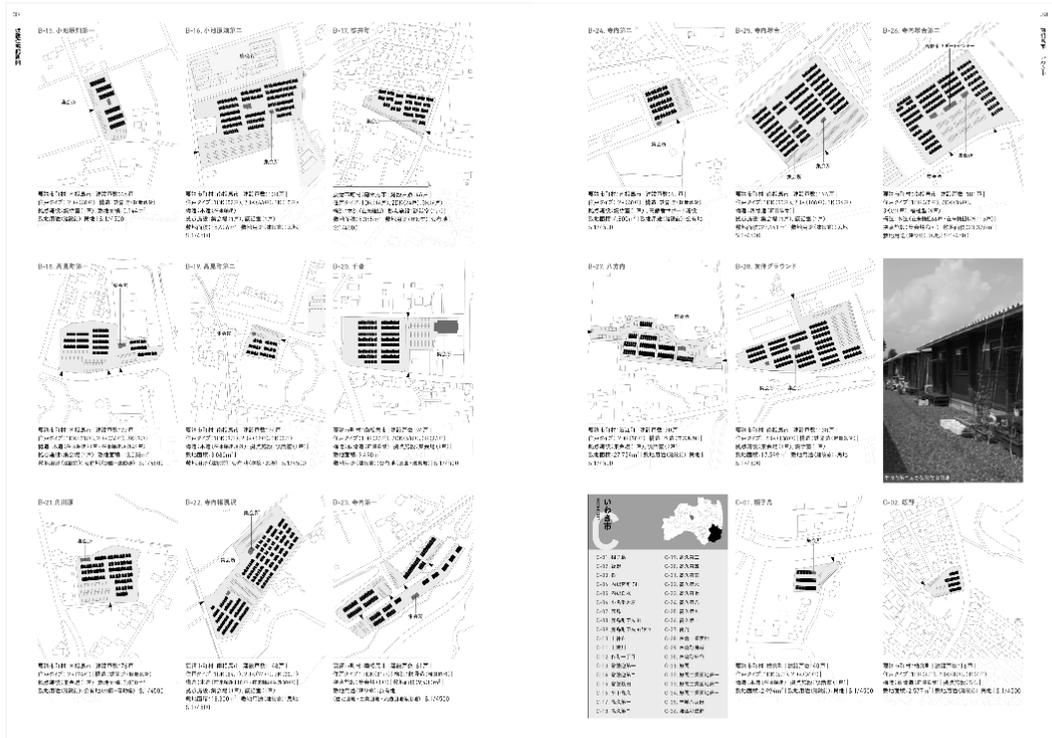


図5 仮設住宅プラン集（一部、『福島アトラス 02』2018年3月）

復興公営住宅、どこに位置していて、どこに皆さんが入ったかも市町村別に全てまとめている(図6)。

さて、これは避難の動きをわかりやすく図式化した模式図だ。さきほどお話したとおり、避難はみんなそれぞれ違うのだが、2017～2018年くらいには避難の動きにも一定のパターンが現れているということが見えてきた(図7)。

まず、元々の故郷から転々と遠くへ逃げる。これは自治体単位の集団的な移動にしたがった人たちもいるし、バラバラに動いた人たちもいる。自治体によってもこのあたりは様々で、さきほど例を示したように、さまざまな個別事情を反映して多様な線分を描いた。夏になると仮設住宅ができるのでまた動くが、仮設団地がつくられたのは被災地の周辺の主要都市圏であって、元に戻るのではないが、その周辺にかなり近づいたことになる。じつは避難12市町村をとりまくように、いわき市、郡山市、二本松市、本宮市、福島市、伊達市、相馬市など人口数万～30万人台の元城下町クラスの都市があり、その空いた場所に仮設住宅団地がつくられるケースが多く、そこへ集まってくる。つまり2011年春に分散的に遠くへ遠くへと動いた人々が、その年の夏から秋にかけて故郷の周囲の中核的な都市に集まってくるようなパターンをとったといえる。

子供がいる世代、働き盛りの若い夫婦は、避難の初期に、あるいは仮設に住む間に徐々に、仙台や東京など関東の首都圏、全国の縁故ある都市部に移り、子どもを学校にやり、自分の仕事を見つけ、次第に定着していく人たちも多い。しかし高齢の人達は故郷に帰りたいとの思いが強く、仮設団地にとどまる割合が高い。自分はもう長くない

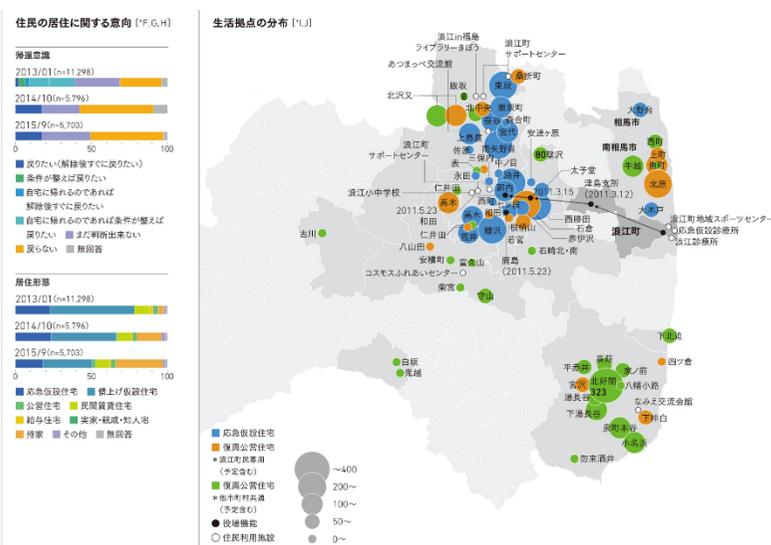


図6 仮設住宅・復興住宅分布(『福島アトラス02』2018年3月)

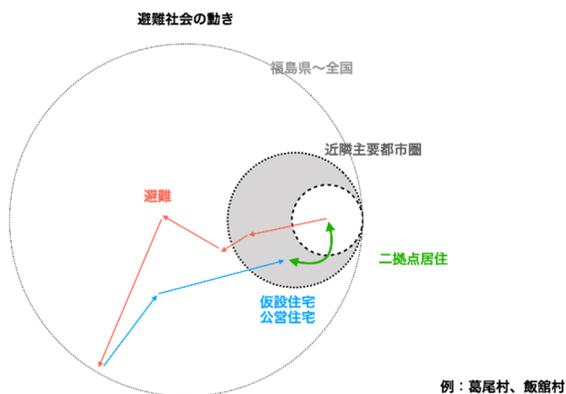


図7 移動パターンの模式図(2017年以降に顕著になった二拠点居住の概念)

し、子どもの面倒をみる必要もなく、仕事をする必要がない、そういう人たちが、除染が終わって避難指示が解除されるのを待って地元に戻るのだ。もちろん若い人たちのなかにも故郷周辺の都市部でなんとか仕事を見つけるケースは少なくなく、彼らは週末になると親を見に故郷へ戻る。毎週のように、家の修理をやってあげたり、畑の柵をつくってあげたりする。彼らは自分で家を立てたり、あるいは公営の復興住宅に住む。こうして、高齢の人と若い人が、故郷とその周囲の都市部に分かれて住み、通い合う。そういう二拠点居住のパターンが避難指示が相次いで解除された2017年春くらいに見えるようになった。繋がりには維持しているから、いずれは戻ってきてくれる帰還予備軍ではあるのだが、それはしばらく前までの希望であって、確かにじわじわと戻ったが、現状では人の動きがほぼ止まったといわれている。2018～19年のあいだに、だいたい戻る人と戻らない人が決まったという印象だ。心の中は揺れ動いている。でも、表面的な現れとしては膠着状態になった、ということだ。この、心のなかの揺れについても、ぜひ理解しておいてほしい。

### 2-3 社会を失った空間①（農村）

先ほどまで見てきたのは、場所を失った社会の動きだ。普通に人々が住んでいる場所は、そこに空間と社会があり、そのふたつが安定した結び付きをつくっている。しかし福島では、空間（場所）を失った人たちが、移動を強いられた。その空間を失った人々、あえていえば空間を失った社会としての「避難社会」を見つめようというのが、『福島アトラス 01』と『福島アトラス 02』だった。それに対し、今度は人がいなくなってしまった空間のかつての姿を描くのが『福島アトラス 03』以降の活動になる。そこはどんな場所であり、原発事故でどんなことが起こってきたのか。

まずは、農村の様子。これは今年になり、先ほどの集落を訪ねた時の様子だ。試験営農が終わり、人が戻っていなくとも、通ってきて田んぼをやる人が多くいることに、希望が持てる。近隣に住み、地元へ通って農業をやる人が決して稀ではないから、この秋口には、稲刈りや、稲架掛けの風景を多く見た。

これは、歩き回っている時に見かけた炭焼き小屋だ。福島は、浜通りと阿武隈高地の町や村が、とくに原発事故の影響を強く受けた。元々、豊かな地域ではない。土壌も決して恵まれていないし、寒冷地なのでよく冷害が起き、近世には年貢を納めるのにずっと苦勞してきたところだ。自分たちの生計の足しにするため、様々な副業をやらなければならず、そのひとつが炭焼きだった。山にたくさんある木を切り、炭を焼く。今は炭焼きは一般的にはやっていないが、たまたま通りかかったこの小屋のなかを覗き込むと、びっしりと綺麗に木が詰めてあった。ひょっとしたら、これから焼くぞという時に地震がきて、翌日あたりから避難がはじまり、放置されることになった、そんな事情だったかもしれない。

ひとつひとつの家ではどんな住居を営み、どんな庭を作り、周りに彩り鮮やかな果

樹や広葉樹を植え、どれほどの水田や畑を開き、そのためにどこから水をひき、また生計の足しに何をやって生きてきたか。そうした人間の生が刻み込まれた風景から一步入ると緑の常緑針葉樹が増えていく。国・県が管理して植林を進めてきた、もうひとつの人工的環境だ。この世界は、地球がつくった地形、大地、生態系を、人間がさまざまな階層で改変することで、境界や秩序を与えられている。

ある方は、戦前・戦中に満州におり、終戦後に引き上げてきて自分の故郷の長野に戻ったが居場所はなかった。満州から引き揚げた人たちは、だいたいそういう目にあい、国が提供する新しい土地を求めて各地へ再入植していった。福島県でも国有林の払い下げを受けて樺太、朝鮮、満州から戻った方がたくさんいる。そのため戦後の人口が増えている。この方も、満州でたたきあげてこれ、福島への入植後もたくましく生きてきたという感じの方だった。その開墾時代の生き様など魅力的なお話をたくさんうかがった。

ちょっと引いて見ると、先ほどのお宅がこの辺にあるが、その周囲は自分の土地だ。しかし手前の広大な土地は、70～80年代以降に酪農や牧畜に展開した人たちが、ブルドーザーで広げていった牧草地の風景だ。色んな歴史が、こうして積み重なっているのがよく分かる。

さて、みなさんにショッキングなのはこういう風景であろう（図8）。これが農地の除染だ。放射能は、空中を風にのって飛び、雨や雪で下に落ちる。それが、家、屋敷林、庭木、山、ため池、河川、農地、すべてに降り注ぐ。実質的に山はもう諦めざるを得ないが、国としては少なくとも農地と宅地に関し



図8 農地の除染（南相馬市小高区・2017年1月撮影）

ては、住めるように戻すため、きれいに洗い流す作業をする。水で洗えばそれなりに落ちるが、洗った水は溝から河川へ流れ込み、太平洋へ注ぎ出るわけだ。希釈・拡散するので、まあまあ大丈夫という世界だ。農地では土を削る。元々ある表層から数cmから10cmくらいの土を取り、これをフレコンバッグという非常に破れにくく強いビニールのバッグに詰める。そして、町村内、あるいは県内のどこか違う山を削り、その砂を入れて「原状復帰」となる。田んぼの土は黒い。その黒い土が全部はがされ、上に黄色い砂地が入れられた。奇妙な風景だ。このままでは田んぼにならない。再開するためには、肥料を入れ、下に残っている肥沃な土とかき混ぜて土壤改良を徹底的にやり、黒い土を取り戻してやる必要があるのだ。1～2年頑張ればなんとかなるが、除染がおわったばかりの黄色い田んぼが連なる風景は、あまりにも異様だった。

次の写真ではそうした黄色い農地と無住の家々が混じる。建物については、住民が希望すれば、環境省が無償で解体してくれる。これも除染の一部だ。この集落は、茅葺も残っていたりする古い家が多いが、無料で壊してくれるとなったら、皆さんならどうするだろうか？惜しいと思う人もいるかもしれないが、実際は汚染された家を無料で壊してくれるなら早く壊してくれとほとんどの人は希望する。実際、順番待ちになっていて、ゼネコンの下請け業者が来て、順番にひとつひとつ引き倒していく。そして家がなくなると、敷地の表層土を数cm削り、新しい土を入れ、宅地では砂利を敷いて仕上げる。あとはもうご自由に、ということだ。

このように除染は進められ、放射線量はまあ生きていくのに支障のない数値まで落ちましたということになる。同時に東電は、住民の皆さんに与えた損害を賠償するため一人一人に補償を渡した。もちろん必要なことだ。だが皆さん、どうだろうか？お金を渡され、自分の故郷は綺麗になった、さあどうぞと言われても、戻るだろうか？そのお金を使って、都市に住むのではないか？綺麗にし、金は渡した、後はご自由ですというのが、国のスタンスだ。これが、福島の基本的な現実である。

これは飯舘村の比曽地区。江戸時代の初期から開墾されてきたところだ。かつては蛇行する川と、地形に沿った細切れのだんだん田んぼという風景だったが、平成に入った頃に圃場整備、つまり農地の区画が綺麗になり河川もまっすぐになった。そういう効率のよい田んぼにこそ、黒いフレコンバッグが集められ、緑色のシートが被せられる。田んぼの所有者は国から借地料をもらう。ここは除染後に黒い土に戻して田んぼを始めたばかりだ。隣の田んぼも、秋の土おこしをやり、春にもう一度耕運機をかけると営農ができる状態になっているが、まだ草が茫々のところもある。

フレコンバッグは4層か5層くらい積んである。西洋建築史で習ったのではないかなと思うが、エジプトのピラミッドの原型、いわゆるマスタバのような恰好をした台形に積み上げられている。それが圃場整備の終わった田んぼを埋めるという皮肉な風景だ。集落の向かいに、震災前、集落の裏に点在していたお墓を集めてきた墓地がある。むこうには山並みがあり、杉の木立があり、居久根と呼ばれる防風林に守られた屋敷があり、手前に田んぼと墓がある。その間にフレコンバッグのマスタバがはさまった風景だ。ここでは、0.43 マイクロシーベルトという放射線の数値が見える。このようなモニタリングポストが各所にあり、線量の数値が分かるようになっている。政府は時々数値を発表するが、住民は信用しない。この数値が人と社会を左右する。例えば同じ村の中でも、うちは下がったが、隣の家はまだ高いということが実際にある。そういうことが除染や補償を左右し、さまざまな感情のもつれを引き起こす。外から見ると、福島は可哀想だと思うだろうが、実は地域社会の内部に様々な細かく見えない分断線が生じていることが、とても深刻だ。

これは元々、フレコンバッグのマスタバがたくさんあったところだが、今はグリーンシートがはがされ、別のところにフレコンバッグが運び出されている。運ぶ先は、各

町村に整備されつつある減容化施設だ。焼却することで土や瓦礫の体積を減らす施設だ。放射能は落ちないので濃縮されるが、体積を減らすことにより、第1原発を取り囲む広大なエリアに整備が進む中間貯蔵施設へ運ばれていく。こうしたプロセスが進むと、農地がいちおう綺麗になり、それぞれの所有者が営農できる状態になる。

これが減容化施設の一部だ。この近くに減容化施設の中核をなす工場があるが入れない。これは償却後の灰を保管する施設。非常に巨大な白い「家型」の建物で、皮肉なほど美しいが、どうしてもなく異様だ。ここは飯館村の蕨平という場所で、もとは全てが田んぼだ。いまでも汚染の数値がやや高い。このすぐ先の長泥という地区はまだ除染の目処がたたない帰還困難区域だ。人が戻ってくる場所には減容化施設はつくられない。

こういった場所では、農地は放置され、当たり前だが、あつという間に自然に飲み込まれる。少なくとも当面は営農再開できない農地にはソーラーパネルが大量に建つのが一般的だ。地元の出資でつくった会社が売電により自分たちの復興資金にしていくという動きもある。

この写真は浪江町の割と広く開けた農地、田んぼが延々ひろがるが、帰還の目処がたたないというところだ。除染は終わっているが、現時点ではほぼ帰る人がいない。さきほども言ったようにソーラーパネルが並ぶが、あまりにも広大に延々と並ぶ風景は異様だ。

福島原発事故災害、放射能災害は、「見えない災害」だと強調したが、説明しないと本当に何が起きているのか分からない。しかし、見えてくるとやはり風景は色々なことを語ってくれる。少しばかりの知識を持ち、福島に行って実際の風景を見れば、そこでどういうことが起きているのかが読み取れるし、一つ一つの集落でも1~2軒は帰ってきているので、そういう方を訪ね、お話を聞くのも良いと思う。建築、あるいは住まいや街づくりについて学んでいる皆さんは、ぜひ、できるだけ早く、一度は福島に行くべきだと強く申し上げたい。数値が高いところはきちんと立ち入り禁止になっているので、当たり前だが入ってはいけない。防犯カメラで捉えられる。私たちが疑われて、何度かパトカーに追われた。他の立ち入り可能な場所は、私が言うのは問題があると思うが、数値が下がってきているので、しばらく車で通りすぎる程度ではほとんど身体的な影響はないと思う。もちろん、みなさんが判断すべきことだし、未成年の方は親御さんの判断も必要と思うが、ぜひ見に行った方が良い。近代が生み出した、莫大なエネルギーを生み出す化け物のような施設がいったい何を引き起こすのか、それを地域社会はどう経験しているのか、そして国や企業は何をやっているのか。少なくとも風景を目で見て、世の中で言われていることと繋げてみれば、いやおうなく多くのことを考えざるをえないはずだ。

ところで、せっかく営農を再開したのに2019年10月の台風は大きな爪痕を残した。一方できちんと農業が始まっているところもある。黒い土を取り戻した人もいる。一

部の人だが、とても頑張っている。非常に理不尽なことに自分たちの生活を断ち切られた人たちは、当然、なんとかしたいという思いがあり、意識がとても高い。逆に、もう戻らないと決めて近隣の都市や、関東、宮城に引っ越し、普通に仕事をし、子どもを学校に通わせている人たちには、ものすごく後ろめたい気持ちがある。だからこそ、より匿名的な名前のない人間としての生き方に傾くのではないかと想像する。多くの人は、心に引き裂かれたものを抱えている。

## 2-4 社会を失った空間②（市街地）

今度は市街地を見てもらう。

12 市町村の浜通りには、当然だがいくつかの主要な市街地もある。浜通りには国道 6 号線が、縦に長い被災地を南北に通っている。双葉町と大熊町の多くはいまでも立ち入りできないが、国道 6 号線だけは誰でも通過できる。ただし、帰還困難区域で車の窓を開けると怒られる。ましてやドアを開けて車の外へ出てはいけぬ。私たちも警察の職務質問を受けたことがある。実は最近諸外国のユーチューバー達が、許可されていない所や、フェンスの中へ入り、家屋の中を勝手に探検する動画をあげることが流行っており、最近では帰還困難区域で立ち入り禁止であることを示す看板に、英語が記されるようになった。



図9 国道6号線（大熊街熊集落・2017年1月）

国道 6 号線は、こうしたなかで帰還困難区域を突っ切る特異なトンネル状の空間だ（図 9）。私たちは数えきれないくらい往復している。普通国道は、集落を迂回して路線を決めるのだが、大熊町のこの集落だけは、集落を貫く旧街道が拡幅されて、そのまま国道になっている。両サイドにずっとフェンスが建ち、当然、フェンスの背後の家々には誰も住んでいない。ここを通る間、家は見えているが、実質的にはないのと同じ。「ないものとせよ」という数学の仮定みたいな命令として、このフェンスは立っている。そういう意味では、何も無いところをただ道路だけが通っており、南と北の避難指示解除されたエリアのあいだを、まるでワープするような感じだ。

次に、一応帰れるようになった街の風景を見よう（図 10）。これは、無料で建物を壊してくれて、そのあとに土が入り、砂利が敷かれた状態だ。富岡町、浪江町、南相馬市小高区など、よく似た小規模の市街地があるが、毎年訪ねるたびに風景が妙に明るくなっていく。奇妙に爽やかなのだ。風景が開け、なんともいえない虚無感を覚える。建物がうんと少なくなった風景のなかに、敷地境界線がくっきりと浮かび上がる。私た

ちが生活を営んでいる生活の下にある所有の観念の線が非常に見事に露出するという、やはり異様な風景だ。

庭木は、住人によりこの木は残してほしい、この木は根から引き抜いて欲しいなど、ひとつひとつ指定できる。そのためのリボンがついている。しかし大方



図 10 除染が進む市街地の風景（富岡町・2017年1月）

場合はまったくの更地にしてしまう。だからこの2～3年で町の密度は失われ、徐々に視界がひらけていき、爽やかな風景に変わってってしまう。それが、次には草茫々の荒地に変わっていく。

綺麗だった砂利の隙間から雑草が出て、徐々に雑草に埋め尽くされていくだろうという感じだ。街にはいくらか住む人もあるが、8割は無人数という印象だ。農村ならば、目の前の農地に青々とした稲や黄金色の実りの風景が蘇ると希望を感じる。帰還者が少なくても、そこに農地があれば、通いでも営農がはじまる。農村はたとえ経済的に本業といえなくても、やっぱり土が基盤なのだ。対照的に、街はかなり深刻だ。街は、人が集まって成り立っている。つまり集積が基盤だ。持ちつ持たれつの経済的な場が蘇るためには、ある程度の数がみんなで一斉に戻る決断をしないとなかなか展望がみえない。街の復興は、おそらく農村より深刻だという感じを私はもっている。視界が斜めに抜けていくのには驚いた。

### 3. おわりに

しかし、冷静に考えてみれば色々な地方都市で見る市街地の風景をいくら早回しにして近未来を見ているのだとも言える。そう考えてみると、色々な地域が福島と地続きに見えてくる。実際、福島が経験していることは、他の地域が経験していることを10年か15年前倒しに経験しているのだと言われる。これは深刻なことだと言うと、ある役場の若くて元気の良いやり手の青年が、こういう風に僕に明るく反論した。いや違う、こういう状態が10年早く来てくれたから、まだ元気なおじいさんが残ってくれている。もし、普通に自然に人口が減り、現在の福島くらいの人口減少に立ち至ったとしたら、いま60の人は70あるいは75歳。いま70歳の人は生きていても元気に働くというわけにはいかない。気付いた時には手の打ち様がない地域は、実は日本には多いし、今後もそうだろう。福島にはまだ頑張れるおじいさんやおばあさん達がいるし、実際に彼らが頑張っていると。最初に紹介したSさんも、そのひとりだ。

今やれることは全部やるんだという人たちが、福島の各地で動き出している。

また他方では、県内外から、新しい人々がすこしずつ12市町村各地に移住しはじめている。たとえば帰還者人口が20%、300人という村に、30人の移住者が現れるというスケール感だ。これはかなり力になる数字であり、役場や村の人々が彼らの営農を支援する動きが新しい関係を作り出したりもしている。

こうして、さきほどお話したような人々の動きのパタン、つまり二拠点居住のような状態がある程度固まってきて、彼らが生活と地域の再建にむけて努力をはじめ、新しい住民があらわれる、さらに営農規模の拡大や太陽光発電の売電事業など新しい取り組みも加わって、事故前とは違う新しい社会が立ち現れていくのだろうということを、予感させる。この新しい社会が、先祖たちが数百年かけてつくりあげてきた環境世界をどう生かしていくのか。福島でこれから進むことは、そういう構図のなかで理解できるだろう。

『福島アトラス』が、「避難社会」だけでなく、「環境世界」の地図を描いているのはこうしたねらいからだ(図11)。過去5億年のあいだにどんな地形がつくられてきたのか。そこに

人々はどんな集落を営んできたのか。自然環境はどう改変されてきたのか。どういう生存の様式が組み立てられてきたのか。アトラスチームではイラストレーターも一緒に調査をしている。インタビューを色んな人に何度も行い、このような鳥瞰図を描き、さらにひとつひとつの場所を抜き出して、屋敷、間取り、農地、集落の全てに至るまでを図解していく(図12)。

どの集落が、どのような規模で

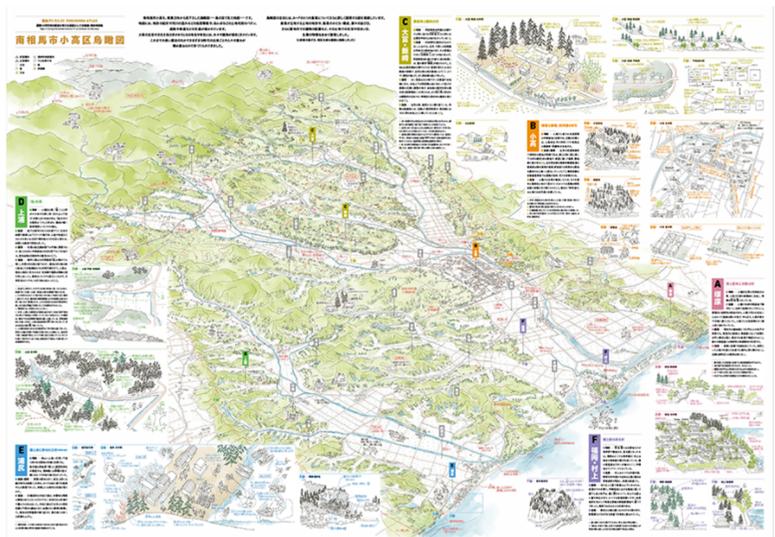


図11 地域の鳥瞰図を描く(『福島アトラス03』2018年3月)

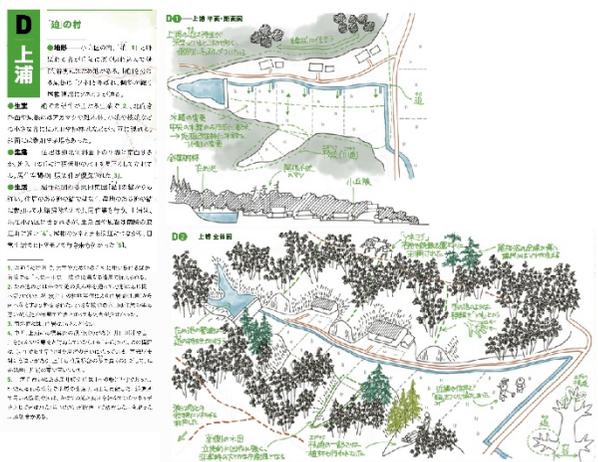


図12 集落の環境世界を描く(『福島アトラス03』)

今まで営まれてきたのか、そこに今は何軒戻っているのか、例えば 25%、4 分の 1 しかいない人口で、今までの規模の集落を維持していくためには、どんな手を打てば良いのか。具体的にやる気がある人は、近隣の農地を借り受け、営農規模を拡大することで、経済ベースにのせていく動きを実際に始めている。牧畜の人は、補助金を使ってカナダ等から大型機械を買い、北海道まで勉強しに行き、大規模酪農を展開する人もいる。こういう場所はとても悲しく絶望的に見えるが、一方では、芳賀沼さんの仮設住宅の可能性のように、事故の引き起こした理不尽な状況のなかから出てきた新しい芽や、色んな可能性が少しずつ見えてきている。

インタビューでは基本的にはライフヒストリーを聞く。その人が生まれてから今までの人生を、2~3 時間程度の短い時間だが、できるだけたくさん聞き、そして一生の時間と生活のひろがりから、集落の仕組みを復元していく作業だ。たとえばある男性は、若いころは東京へ出て、鉄道の山手線や、新幹線など鉄道の軌道をつくる職人を束ねる親分として頑張ってきた人で、仕送りをして、地元で田んぼを広げてきた。頑張ってきて、これを息子たちに引き継ごうと思ったら、原発事故に遭った。私たちは、色々な筋から紹介を得て訪ねていくので、こうして割と親切にお話を明るくして下さるが、それはそういう方を選んでいただいているからだ。それでも話の途中で多くの人が少しずつ涙を目にためる瞬間がある。

もっと事故の重さを突きつけられる経験もある。自分の自治会長時代に、集落としてふるさとに戻らない決断をせざるをえなかった。子供のころからの昔のことはとても楽しそうに話して下さったが、こちらが意を決して「事故以降のことをうかがっても良いですか」と聞くと、「帰ってくれ」と言われた。

私たちには到底とらえきれないこうした複雑さのなかで、福島原発被災地は、それでも動いている。動き出している。少しずつ局面を描き変えている。福島の経験、今後続く歩みは、私たちがこれからどこに向かうのかを問うている。ぜひ、福島の風景を見てください。

(2020 年 1 月 11 日、生活美学研究所本年度第 4 回定例研究会における講演に基づく)  
コーディネーター 武庫川女子大学生活環境学部准教授 鎌田 誠史

## 指定討論者コメント

TAR 工作室代表 武庫川女子大学非常勤講師 垂 水 英 司

大きな災害に見舞われたとき、その復興ツールは先行する概ね 30 年間に構築された社会システムの制約から逃れられない。したがって復興過程で大きな「時代ラグ」が生じるが、一方でそれを打破する動きが生まれて次の新しいシステムへ前進する。1995 年成長社会から成熟社会に移行する入口で発生した阪神・淡路大震災、あるいは、その 16 年後縮小社会が進行する中で発生した東日本大震災でもいえることだ。問われたのは、①物の復興から生活の復興へ ②移転復興から現地復興へ ③大きな復興から一人一人の復興へ ④早い復興から適速の復興へ ⑤公共力から社会力へ といったことであろうか。

被災者一人一人の生活再建の視点から、「可視化」というユニークな手法で取り組まれた青井哲人氏の福島アトラスなどの成果をお聞きして、まさに次の復興への大きなヒントをいただいた思いだ。

元 国立民族学博物館 准教授 佐 藤 浩 司

2004 年、インドネシアのアチェを大規模な津波が襲いました。その後の調査で援助のもたらす第二の災害について考えさせられました。自然災害に対して文句を言う住民はいません。しかし、福島の場合にもありましたが、援助の多寡や方法をめぐって住民のあいだには嫉妬や怨嗟の感情がおきます。もうひとつ、津波災害の特徴は、身近な者を失うだけではなく、家や環境、自分の歴史にかかわるすべてが一瞬に消えることです。海岸沿いのある村はおよそ 3000 人いた住民が 7 人を残すだけになりました。残された住民は悲しむことができないでいました。なぜなら、自分たちが何者であるかを証明する手立てさえないからです。われわれのアイデンティティとはなんと儂く頼りないものでしょう。そう、自分の存在に形をあたえてくれること。これこそがデザインの本質（ただ格好良い物を生み出すことではなく）ではないかとおもいます。きょう紹介された建築家や住民の活動こそそのよき見本ではないでしょうか。

本日の発表は私自身にとってもかなり衝撃的な内容でしたが、最後に 3 点ほど指摘しておきます。第一に、まったく別世界の話のようですが、これはわれわれの同時代に、地続きの土地で起きている事件であるということ。第二に、この事件にどうかかわるかは人それぞれの仕方があるでしょう。だからといって背伸びをする必要はなく、自身のあたえられた環境のなかで、身の丈の対応を考えるべきだろうということ。第三に、やはり指摘しておかねばならないのは、これは自然災害ではなく人災だということ。人災なら人間の力でそれを予防できるはずだからです。